
東方妖霊記 ~ venomous daemon ~

ANVIL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方妖霊記 ～ venomous daemon ～

【Nコード】

N4509L

【作者名】

ANVIL

【あらすじ】

駄作者「大ちゃん可愛いよ大ちゃん（*、*）ハアハア」
ミシヤ「一片死んでこい」
駄作者「アッー！」
こんな感じかな？

非常識の世界（前書き）

私たちの住んでいる世界と繋がりを持ちながらも、独立した世界
「幻想郷」

私たちの感覚で言う非常識が常識の世界

この物語はそんな世界に住む一人の妖精の男の物語です

非常識の世界

鬱蒼と木々が生い茂る森の中を一人の少年が歩いている

彼の名はミシヤ

妖精の中でもずば抜けた能力と実力の持ち主であり、普通の妖怪程度なら軽くあしらってしまいう程である

彼は黒の長ズボンに紺色の半袖シャツとカジュアルで普通の服装をしている

だが、私たちの世界の常識が非常識となる世界では珍しい服装だろう

「多分いると思うけど……とりあえず呼んでみるか」
「ミシヤが大きく息を吸い込み、

「おおい！チルノいるか！？」 叫んだ

すると近くの草むらが揺れ、一人の少女が現れた

「さすがアタイったら最強なだけあって有名ね」

草むらから現れたぶつちやけ痛い少女の名前はチルノ

彼女も妖精の中では強い方だが、彼女の強さは妖精の中だけであり妖怪などに比べると力不足である

それだけに妖怪よりも強いミシヤは特別なのである

実は妖精の形をした何か別の種族の生き物と言っ話があるくらいだ

「あれ、ミシヤじゃん。こんなところでどうしたの」

……チルノは残念ながらバカである

先ほど彼女が呼ばれたことを既に忘れていた様子である

「なんだ、大妖精と一緒に無いか？」

普段、チルノと一緒にいる、大妖精と呼ばれる妖精を探している様子のミシヤ

「そう言えば今日大ちゃん見てないなあ。どうしたんだろ？」

チルノは少しの間考えたがすぐにどこかに行った

恐らく、湖にでも遊びに行ったのだろう

「仕方ないし、探すしか無いみたいだねえ」

チルノと別れたミシヤは先ほどいた森、魔法の森の奥へと入って行く

「本当に大妖精どこにいるんだろ？」

数十分探すが、大妖精が見つからない様子

「そーなのかー」

そんなミシヤの前に金髪の少女が現れる

「ルーミアか、大妖精見なかった？」

彼女はルーミア、妖怪の中では弱い分類である

しかし、彼女の闇を操る程度の能力で周囲を夜のような暗闇にして、人を襲うので人間にはおそれられている

「大妖精はしらないのかー」

……先ほどのチルノと同じで少々頭が弱い様子

「そうか、知らないのかあ

でも、本当にどこにいるんだらう?」

ミシヤの中で探すのを少し諦め始めたその時だった

「きゃあああ!」

と女の子の叫び声が聞こえた

「今の声、大妖精の声だ!」

どうやら、叫び声はミシヤが探している大妖精の声の様子

「大妖精どこにいる!?!」

必死に叫ぶミシヤ

「今の声はミシヤ君?……こっち!こっちだよ!早く来て!」

ミシヤの声が聞こえたのか、返答が森の奥からあった

「待ってて!今行くから!」

出せる力を出し、地面を蹴るミシヤ

すると、すぐに大妖精が視界に入った

大妖精は緑の髪の妖精で、名前の通り妖精の中では強い方だが基本的に一般的な妖精と同じと考えて良い

「ミシヤ君助けて!」

大妖精は自分の周りを狼のような妖獣か、妖怪に囲まれていた

「あいつら妖精襲うのにそんなに多い数か……妖精を狩ると普通は損失無いからな……」

ただ、大妖精に手出しだけは俺がさせない」
大妖精を守るように獣達の前に跳んで現れるミシヤ

「ミシヤ君！」

ミシヤが来てくれた事が嬉しい大妖精

「お前ら大妖精を傷つけようなんて良い度胸してるね

この俺の力を見せてあげるよ」

獣達はいきなり現れたミシヤに少し困惑していたが、すぐに敵と認識しミシヤに襲いかかった

下級妖怪

獣がいきなりミシヤに飛びかかる

それを少し後ろに跳び、避けながら敵の数を数える

「五匹か……」

数を確認して、十分に倒せる相手と完全に認識したミシヤ

しかし、数で勝っている獣達がミシヤにヒマを与える訳が無く別の獣が飛びかかる

「遅いよ」

ミシヤは体を左にずらし、獣に右の拳で一撃を食らわせる

獣はキャン！と情けない声を出して仲間達の所へ戻る

「ほら、早くかかってきな。全員この俺が相手するよ」

獣達に挑発するミシヤ

「全員でかかって来たね

一匹一匹来てくれたら方が早いかもしれないけどまあ良いや」

言いながら強く地面を蹴り、前へ踏み出し一番近い獣に肘打ちをする

飛びかかってきた獣は肘打ちを食らい減速する

獣達はそのまま戦っても倒せないと感じたのか、今度はバラバラに攻撃してきた

「分かれた………どどんめんどくさくなる………」

まず、右前に迂回してきた一匹が襲いかかる

ミシヤは何も言わずに左手で獣の横顔を殴り飛ばした
獣は、そのまま木にぶつかり気絶したようである

しかし、獣たちも一匹倒されただけでひるんでいられない様子
間をおかずに正面から一匹突っ込んできた

「余裕だね」

ミシヤは体を左にそらすだけで避ける

そこに、獣が今度は左から突っ込んでくる

「よつと」

ミシヤは無駄な動きだが、馬跳びの容量で狼の上を跳ぶ

そんな無駄な事してたから後ろから一体が既に飛びかかって来て
いたが普通に受け流し、ついでに裏拳もくらわせる

三匹が攻撃している内にミシヤの背後をとっていた、一匹の獣が
飛びかかる

「それじゃ、もうそろそろスペルでも使おうかな」冷符「ミユール・フィジェ・アブソリュム絶凍の壁」

ミシヤの後ろ二メートル程の所に薄いキラキラした膜が出来る
その膜に直接突っ込んだ獣は凍り、動かなくなった

「これで、二匹片づいたね

残りは一匹か」

余裕な様子のミシヤ

仲間が倒された怒りや、ヤケクソな気持ちから一匹が突進してきた

しかし、直線的なのでミシヤは少し動くだけで避ける

その時、死角から他の獣が噛みついて来てミシヤが急いで避ける
急いで避けた為に牙が少しかすったが傷はつかなかった

そして、ミシヤが少し気をとられている時に残りの一匹がミシヤ
の前を走り去った

「きゃあああ！」

そして、すぐにミシヤは前を去って行った一匹の目的を理解した

「大妖精！」

ミシヤはすぐに大妖精と獣の間に入り込み、大妖精を守る

「お前……そんなに死にたいのか？」

それなら、お望み通りに殺してやるよ……」アクティヴィティ・アルト「禁忌」「活動停止」

ミシヤがスペルを発動する

すると、大妖精を狙った獣が急に動かなくなり、ぐったりとして
いく

「生物は活動する為に細胞でエネルギーを作り出す

そのエネルギーは細胞の呼吸で化学エネルギーから熱エネルギー
へと変換される

つまり、エネルギーは熱なのさ
俺は熱を操れる

つまり俺は熱エネルギーを消せば、生物のエネルギー供給を断ち
切る事だって出来るのさ

精々そこで残り少ない命で過去でも振り返ってるんだな」

長々と説明するミシヤである

簡単に言つとエネルギーを全部消して、餓死させようとしてるの

である

流石に恐怖が一匹の獣の脳を支配したのだろう
獣の中の一匹が逃げ出そうとする

「今の俺が逃がしてあげると思う?」

しかし、カードを片手に持ったミシヤが前に立ちはだかる

「『灼符「灼熱地獄」』」
↑レ・ファイエール・アンフェール

別のスペルを発動するミシヤ

ミシヤが能力で気温を急激に上げた為に周りに陽炎ができる程である

もちろん、近くにいた獣は急激な気温変化に耐えられず徐々に水分を熱に奪われていく

残り一匹となった獣は勝ち目が無く、逃げられもしない事に気づき既に何もする気が起きていなかった

その時、一番最初に木にぶつかって気絶した一匹がユラユラと立ち上がった

そして、最後の二匹に合図を出した

恐らく内容は「俺が引きつけるから逃げろ」とかだろう

「ウオオオオン!」

合図した方が気をひく為にわざと吠えてミシヤに飛びかかる

ミシヤも鬼では無いので、その様子を見て命はとらないでおくか
と思った

「何度来ても倒してあげるよ」

しかし、口に出せる訳無いので本心と違う事を言う

獣はミシヤの首を狙って噛みついて来る

ミシヤはそれをわざと避け損ない左腕を噛まれる

「グツ！離せ！」

腕を振り、獣を無理やり引き離そうとするがかなり深く噛んでいる為になかなか外れず

「ビチビチビチッ！」と肉の避ける音がする

「くそっ！」

体をひねり腕を素早く振り、獣を近くの木に当てて引き離す

「ハアツハアツハアツ……これで最後だ……」

ミシヤがスペカを取り出す

その様子を見て、これ以上は危険と判断した獣は全力で去って行った

ミシヤについて（前書き）

ミシヤについて簡単に説明したいと思います

なお、話とは関係無いので飛ばして貰っても結構です

ミシヤについて

この章ではミシヤについて、簡単に説明したいと思います

容姿……

肩あたりまであるストレートの銀髪

目は両方濁った紫色だが、微妙に右が青く左が赤い

服装は基本的に長ズボンに半袖シャツである

能力……

熱を操る程度の能力

簡単に言うと温度や、物体のエネルギー自体を操る事ができる

もちろん、熱を上げて燃やすだけで無く、熱を下げて凍らせたりもできる

気温差で光を屈折させたりもできる

スペカの読み方について

ミシヤのスペルは『カタカナ符「日本語」』

と表記される

書くときは日本語の方だが読む時はカタカナのほうである
つまり、カタカナは振りがなである

ミシヤについて（後書き）

これで自分の作品が少しでも読みやすくなる事を願います

それでは次の章から再び本編です

道中

「ハアツ…ハアツ…くっ！……逃げたか……」
『活符「細胞活性化」』
ガイザマン・レスヒレ・セリユル

「ミシヤはスペカを使い、細胞の働きを活発にして治癒力を高める

「ふう……少し疲れたなあ」
地面を座り込むミシヤ

「ミシヤ君大丈夫！」

「ミシヤの怪我を心配した大妖精が近寄る

「うん、大丈夫だよ」

「ミシヤが大妖精に笑いかける

「でも、いくらミシヤ君でもその傷はひどすぎるでしょ……」
泣きそうな大妖精

「とりあえず落ち着いて。俺の力で治癒力を高めたからすぐ治るさ」
大妖精を落ち着かせようとするミシヤ

「う、うん分かった」

「少しずつ落ち着く大妖精

「さて、これからどうしようか？」
落ち着いてきた大妖精に尋ねる

「うん……ミシヤ君に任せるよ」
大妖精は特にやりたい事が無い様子

「それじゃあ、ちよつと俺につきあってよ
行きたい所あるんだ」

ミシヤが思い出したかのように言う

「行きたい所つてどこなの？」

極、自然な質問である

「さっきの戦いでもそうだけど、俺弾幕使わないじゃん

多分作れるけど武器とか使った方が簡単だし道具屋にでもいって
めぼしい物を探したいんだ」

傷もほとんど治ったので立ち上がるミシヤ

「道具屋つて香霖堂？うん、私は行っても良いよ」

ミシヤに手を差し出す

「それじゃあ行こう」

大妖精の手を取り歩く

そのまましばらく歩く二人

「ねえ…ミシヤ君」

大妖精が小さな声で話しかける

「どうしたの？大妖精」

振り返って大妖精の顔を見る

「私ちよつと恥ずかしいよ…」

大妖精の顔が赤くなっている

「見られる事は無いって
でも、赤くなつた大妖精も可愛いね」
からかうミシヤ

「そ、そんな可愛いなんて
私なんて全然可愛くないよ」
今にもショートしそうな大妖精である

「それじゃあ行こうよ」
また、歩き始めるミシヤ

「う、うん」 それにつられて歩き始める大妖精

「熱いね二人とも
私もそんなことしてみたいぜ」
そんな時に誰かの声がする

「俺らに何の用事なの霧雨？」
急に来た相手に対して不機嫌になるミシヤ

「霧雨って言うなよ。私には魔理沙って名前があるんだぜ」
その相手は白黒のエプロンドレスを着て、竹箒になっていた
彼女は霧雨魔理沙。至って普通の魔法使いだ

弾幕はパワーと言う考えの持ち主で彼女のスペルは力強い物が多い

「ちよつと視界に入つたから声をかけようとしたただけだぜ
それに私が森で何をしてようが勝手だぜ」

元気が感じられる笑顔の魔理沙

「冷やかしまたは、茶化しに来たなら帰って」

未だに不機嫌なミシヤ

大妖精は魔理沙の「熱いね」発言でショート寸前だった

「方向的に香霖の所に行こうとしてるみたいだな」

森の中にある建物はほぼ全て把握してる魔理沙である

「ああそうだよ」

魔理沙の問いに素っ気なく返事するミシヤ

「そんじゃ、私は行くぜ

また後でな」

箒に載って去っていく魔理沙

「全く…早く行こうよ」

大妖精に問いかける

しかし、大妖精は頭から湯気が出そうな位赤くなっていて、ミシ

ヤの声は届いていない

「お〜い、戻ってこ〜い」

頬をペシペシ叩く

「あっ、ミ、ミシヤ君

そ、そうだね早く行こう」

やっと、帰ってきた大妖精が行こうと促す

「うん」

二人は香霖堂へ向けて歩き始める

「でも…魔理沙の最後の言葉が気になる……

大妖精、ちよつと良い？」

立ち止まって言うミシヤ

「どうしたの？」

大妖精が不思議そうな顔をする

「いや、出来れば急いで行きたいんだけど……どうする」

ミシヤが問いかける

「私は良いけど……私じゃミシヤ君に追いつけないよ」

大妖精が言う

「そうだな……ちよつとこっち来て」

手招きするミシヤ

「どうしたの？」

とりあえず近づく大妖精

「そうそう、それじゃあちよつと失礼するよ」

大妖精は浮遊した感じがした

そして、すぐに自分がされている事を理解した

「ミ、ミシヤ君……これってもしかして……」

再び顔が赤くなる大妖精

「そう、お姫様抱っこ」

ミシヤは大妖精の膝と腰のあたりを持って持ち上げている

「流石に恥ずかしいから早く行こつ」
「ミシヤがそのまま走り出し、香霖堂へと向かう」

武器

「到着つと」

ミシヤ達は一軒の家に到着した

「それじゃあ入ろう」

香霖堂の中へと入る二人

「おや、珍しい客だね

何の用事だい？」

店の中には一人の青年がいた

彼の名前は森近霖之助。香霖堂と言う古道具の店主である

彼は人間と妖怪のハーフで、姿は人間だが、結構長生きしているらしい

「めぼしい物を漁りに来ただけ」

完結に目的を話すミシヤ

「それじゃあ勝手に漁って良いけど僕の所に一度持ってきてね」

彼に勝手に持ち出し、私物化している人間がいるのでそこには敏感である

「ああ、分かってるよ。それじゃあ探そう」

大妖精に言う

「うん」

笑顔で返す大妖精

「それじゃあ大妖精はこの部屋を頼むね
俺は奥の部屋を見させて貰うから」

勝手に奥に入ろうとするミシヤ
しかし、霖之助がミシヤの道を塞ぐ

「奥の倉庫にある物は非売品だから売らないよ
売るには危険すぎる物とかも放置してあるから倉庫には入れられ
ないね」

倉庫には売り物にならない物や単純に霖之助が気にいった物があ
るので関係者以外立ち入り禁止である

「……まあ仕方ないね

それじゃあ、ちよつとここら辺を探るよ」

そんな事は言っているが、倉庫に入ってみたくてしょうがないミ
シヤ

「なんか良いの無いかな……ん？もしかしてこれは……」

ミシヤが少し、ガラクタの山を漁ると中から減音機付きの一個の
拳銃が出てくる

「麻醉銃……上手く行けば倉庫に入れるな……」

ミシヤは麻醉銃を手に、チラチラと霖之助の様子をうかがっていた
その時である

「邪魔するぜ、香霖！」

魔理沙が香霖堂に突入してきた

霖之助が魔理沙に気を取られている間にミシヤは霖之助に麻醉弾
を打ち込み、霖之助を気絶させる

「ん？どうしたんだぜ香霖？」

流石に気絶した霖之助に気付いた魔理沙

「さあ、驚いただけじゃん」
無責任なミシヤ

「とりあえず香霖を他の部屋に運ぶから手伝って魔理沙」
気絶した霖之助を部屋に運ぼうとするミシヤ

「仕方ないなあ……手伝ってやるぜ」
ミシヤと共に適当な部屋に霖之助を寝かせる

「ふう……まあ良いんだぜ。これで正々堂々と借りていける」
元の部屋に戻り、色々な荷物を袋の中に入れる魔理沙

「さて、俺も倉庫に入らせて貰うか」
倉庫に鍵はかかって無いので、そのまま中に入るミシヤ

「さて、探索しますか」
倉庫の名に相応しく、色々な物がずっと放置され埃を被っている
その中から使えそうなのを探し始めるミシヤ

「十分ほど探した頃に、」
「ちよつと兄さん」
と声がした

「……声？」
周りを見渡すミシヤ

「こつちだ兄さん。来てくれ」

声は更に部屋の奥から聞こえて来る

「全く……そつちから来てよ……」

文句を良いながらミシヤが声の方に行くと、一個の木箱が置いてあった

「兄さん、この箱を開けてくれ」

どうやら、声は木箱の中からする様子

「これで良いの？」

ミシヤが木箱を手にとり、蓋を開ける

すると、そこには綺麗な白色のパチンコがあった

「やっぱり俺の感覚に狂いは無かったな

兄さんただ者じゃ無いだろ。歪んでいて、不純な感じがプンプンするぜ」

どうやら、パチンコがミシヤに話しかけているようである

「いきなり失礼だね

君は何者だい？」

パチンコを手にとらずに見るだけのミシヤ

「俺はバイコーンって獣から作られたパチンコだ

バイコーンが何かは分かるよな？」

パチンコは話すと言うよりも音が出ていると言う方が正しい声で答える

「バイコーン……清纯のユニコーンに対して不純を司る二本の角がある幻獣だね」

結構物知りなミシヤ

「なら、もう大体分かるよな

それに、兄さんが飛び道具を探してるのも分かってるんだぜ
どうだ？俺を使ってみないか？」

パチンコはミシヤに自分の使用を進める

「不純な存在から作られた普通じゃない武器ねえ……

良いね、気に入ったよ。これからよろしくね」

ミシヤはパチンコを武器にすると決めた

「流石兄さんだ。俺を気に入るとは目の付け所が良いねえ

これからよろしく頼むぜ」

ミシヤはパチンコが話しているが、パチンコと一緒に箱に入っていた革製の入れ物に入れる

「さて、使うにしても呼び名が無くちゃ不便だねえ……よし、お前の名前は日本語で『不純な二本角』って意味の『アンピュール・コンビヌ・エピーヌ』略して『ICE』でどうだい？」

ミシヤが即興で名前をつける（この物語の制作を始めた頃の作者の厨二病なネーミングセンスで）

「良いんじゃないか

兄さんの名前はミシヤだろ

それじゃあ俺、基本的に寝てるから使う時に適当に起こしてくれ」
勝手に何も喋らなくなるICE

「コイツ俺の名前まで知ってるんだ

これは性能にも期待だね」

ミシヤが倉庫から静かに出る

武器（後書き）

まだ、暫く香霖堂関係の話が続きます

香霖堂

「……君たちは何をしているの？」

倉庫から出てきたミシヤは今の状況を見て何も言えなかった

「あつ、ミシヤ君。え〜つとね、これはね……」

大妖精が今の状況の説明を始める

それはミシヤが倉庫に入ってから……

「ミシヤ君行っちゃった……とりあえず私も探そう
そこら辺の物をどかしたりする大妖精

「しかし、香霖が起きてないと暇だぜ」
適当な所に座っている魔理沙

「なら、手伝って下さいよ」
大妖精が探しながら魔理沙に言う

「まあ暇だしな。探してやるか」
魔理沙が立ち上がり、適当に漁り始める

そこから数分たち……

「これ綺麗だなあ」

「おっ、掘り出し物発見」

最初の目的を忘れている二人である

「ん？こんな柵あつたか？」
魔理沙が一つの柵を発見する

「せっかくだから開けてみるぜ」
柵の戸を開けようとする

「……開かないぜ。なら無理やり開けるだけだぜ！」
柵に弾を発射して、壊して開けようとする

「……この柵硬いぜ」
でも、あと数発で開きそうだぜ」
更に何発か弾を発射する魔理沙

すると四発目の弾で戸が壊れ、中が見えた

「さて、何か掘り出し物は無いかね」
柵の中を覗き込む魔理沙

「ん？何だこれ？」
とりあえず押すか」

柵の中には一個のボタンがあり、ボタンを押してみる

「あゝ……頭痛い……」
丁度、霖之助が起きて部屋から出て来る

その時である。霖之助の上から様々な物が降ってきた

「ぐわっ！」
もちろん押しつぶされる霖之助であるが、

「これは！レア物の宝庫だぜ！」
魔理沙の目が輝き、どんと袋に物を入れる
霖之助の足が物凄くバタバタしてるが気にしない

そんな時に、ミシヤが出てきたのである

「なる程ね……だからこんな状況なのか……
とりあえず香霖を助けよう」
霖之助の足を持ち、引つ張るミシヤ

「ちよつと！痛いよ！」
物の山の中から声が聞こえる

「抜けないなあ……捻れば抜けるかも」
しかし、聞かないミシヤ

「ちよつと！千切れるって！」
必死な霖之助

「あつ……抜けた……」
「……抜けたね」
本当に抜けてしまい、空気が冷める

「とりあえず魔理沙を」
ミシヤがとりあえず話題を出す

「ああ……そうだね……」

とりあえず魔理沙を止めに行く霖之助である

「おお……綺麗なダガーだぜ」

その頃、魔理沙は一個のダガーを眺めていた

「そのダガーは止めてくれ！」

急に焦りだす霖之助である

「そのダガーは！」

マイナーな伝説の鉱物ダマスカス鋼から作られた物じゃ無いか！

金なら出すから譲ってくれ！」

ミシヤの目も輝く

「僕はお金を出してくれるなら良いよ

値ははるけどね」

珍しく、お店の人間になる霖之助である

しかし、

「残念だけどコイツは私が持つてくぜ」

魔理沙を忘れてはいけない

ダガーはまだ、魔理沙が持っているのである

「それじゃあ仕方ないね

俺、グリモワール持つてるけど、使い道無くて困ってるんだよね
だれか、何かと交換してくれると嬉しいんだけどなあ……」

露骨なミシヤである

「うーん……私にとってはダガーよりもグリモワールの方が価値が
高いな……」

なら、そのグリモワールをくれたらダガーは霖之助に返すぜ」
絶対的に魔理沙が損をしない魔理沙の提案である

「その話のつたよ」

ミシヤが一冊の本を取り出し、魔理沙に渡す

そして、魔理沙はダガーを霖之助に返す

「さて、そのダガーはいくらするの？」

霖之助に尋ねるミシヤ

「いや、君にあげるよ

魔理沙から貰ったのは君のようなもんだからね

そのかわり死んだら返してね」

笑って言う霖之助

「なら、私も借りた物は死んだら返すぜ

それじゃあな」

魔理沙が箒に乗って去っていく

「全く……魔理沙はいつもどおりだね……

それじゃあ、このダガーは香霖が返却を断るくらい使いこんで返すよ

それじゃあ帰ろうよ大妖精」

霖之助がダガーの入れ物を差し出していたので、それも貰い大妖精に声をかけるミシヤ

「あ、うん

帰ろう」

大妖精は眺めていたネックレスを戻してミシヤの所へ来る

「それじゃあまた用事があつたら来るから」
香霖堂を出るミシヤ

「失礼しました」

丁寧な礼をして出る大妖精

「またのご来店を」

偶には店主らしく、挨拶する霖之助である

「あつ、ちよつと忘れ物したから待ってて」

香霖堂を出てすぐに言い、香霖堂へ戻るミシヤ

「分かったよ」

香霖堂の外でミシヤを待つ大妖精

「香霖、さつき大妖精が見てたネックレスを買いたいんだが」
中に入って開口一番に言うミシヤ

「ん？ああ、あれね」
別に良いよ

綺麗だけど特別な能力があつたりするわけじゃないからね」
そろばんを取り出しパチパチと珠を弾き机に置く

「値段はこんな物だね」

ミシヤがそろばんを見る

「なら、これで丁度だね」

提示された数字と同じ金額の金を出す

「まいどあり」

「さあ、待たせちゃいけないから早く行きな」
流石にミシヤがどうするかを察している様子

「言われなくても分かってるさ」

「それじゃまた」

香霖堂を出るミシヤ

「ミシヤ君何を忘れたの？」

香霖堂の外にいた大妖精が聞いてくる

「いや、探すのを手伝ってくれた大妖精へのプレゼントを忘れてたんだよ」

先ほど購入したネックレスを見せる

「ミシヤ君……ありがとう！」

「ねえ……できれば……その……ミシヤ君に付けて貰いたいんだけど……」

「ダメかな？」

モジモジしながら小動物のような目で頼む大妖精

「う、うん」

「着けてあげるよ」

大妖精を可愛いと思ひ、顔が赤いミシヤである
ミシヤが大妖精の後ろに立ち、ネックレスを着けてあげる

「ほら、着けたよ」

「まだ、顔が少し赤いミシヤ」

「ありがとうミシヤ君」

一緒に帰ろう」

ミシヤの手を取り、歩き出す大妖精であった

香霖堂（後書き）

テストやらで更新が一週間振りになってしまいました

次の章は、ミシヤの人外としての面を書きたいと思います

自分が今、忙しいので更新がまた、一週間位無いかもしれませんが、このANVIL、少しずつでも執筆して出来るだけ早く更新したいと思っています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4509/>

東方妖霊記 ~ venomous daemon ~

2010年10月9日07時03分発行